高知大学共通教育広報誌［パイプライン］

PipeLine

49
2017.6

特集

初年次科目

初年次科目授業の感想、意義、受講にあたってのアドバイス等

大学基礎論
情報処理
大学英語入門
学問基礎論
課題探求
実践セミナー
英会話

No.49 Contents

特集「初年次科目」	P1~10
共通教育自己点検・自己評価部会の活動	P11～12
共通教育実施委員会からのお知らせ	P13

特集

初年次科目

初年次科目授業の感想、意義、
受講にあたってのアドバイス等

初年次科目

「共通教育科目」には、「初年次科目」「教養科目」があります。今号ではその内の「初年次科目」を取り上げています。これは、入学後すぐに高校以前の学びの転換を図り、自分で考え行動できる力、他者とコミュニケーションできる力、表現できる力などを修得するものです。

「初年次科目」は、「何をなぜどのように学ぶのか」を学ぶ「大学基礎論」、専攻する学問の輪郭を学ぶ「学問基礎論」、「大学英語入門」「英会話」、「情報処理」、課題探求及び解決能力を身に付ける「課題探求実践セミナー」という必修科目からなっています。

Part 1 学生記者から

人文社会科学部
国際社会コース
2年

浜田　杏佑

「初年次科目」

初年次科目は、その名が示す通り初年次における必修科目である。新入生がこれから大学で学んでいくという事の基礎を作る働きを持つものであり重要な科目だ。まず第１学期においては「大学基礎論」で大学施設の利用方法や働きを、「課題探求実践セミナー」では一つのテーマが設定され（平成28年度は“働くとは”）講師の方を招き、それぞれ話を聞いた上でテーマに対する答えを見つけていく。この作業を通し、課題に対する姿勢（疑問の持ち方など）を学ぶことができる。第２学期においては「学問基礎論」が開講され、ミニゼミナールという形式を取り先生方が選定した課題図書を基に少人数で議論や発表を行い、最後に成果をレポートに落とし込む。この講義を通し、２年次から開講されるゼミに対する心構えや技法（レジュメ、レポート書式）を身につけることができる。他にも英語や「情報処理」といった科目も開講されている。つまり大学生が最低限知っておくべきことが学ぶことができるので、重要な科目であると言える。

人文学部
社会経済学科
4年

永井　優子

初年次科目の中に「大学基礎論」、「学問基礎論」があり、普段の大学の講義とは違い、少人数(約10人程)で行う授業があります。基本的に、課題図書を授業までに読んで、その内容についてレジュメを書いたり、授業でその内容について討論したりします。少人数なので討論も活発に行われ、自分の作成したレジュメを発表し、それについて自分の疑問点を出し、その中で話し合いをすることで、いろいろな人の考えを聞くことができ、その疑問について掘り下げることが出来ます。

また、「大学英語入門」、「英会話」も初年次科目の中に含まれています。「大学英語入門」は英文法について学び、「英会話」ではネイティブの先生と授業を行います。大学は高校よりも異文化について学ぶことも多く、また、留学生もいるので、初年次科目で英語を勉強するこ

とで、そのような機会でより多くの知識を得ることができ、異文化間の交流を深めることに役立ちます。

大学は、討論、議論、交流が活発に行われる場です。そこで初年次科目で学ぶことが生かせるのではないかと思います。

教育学部
学校教育教員養成課程
4年

三好　香織

初年次科目について

初年次科目は1年生が必ず受ける授業です。教育学部の初年次科目で特徴的な科目は「課題探求実践セミナー」だと思います。この授業は実際に子どもたちと関わることを通じて「子どもを理解する」ことを学んでいきます。

セミナーでは学生は子ども達とのレクリエーションを企画する。それを行う前に、レクリエーションについての授業や応急措置について、また企画運営に当たって協力してくださる地域の方達と打ち合わせを行うのも学生です。どんな遊びがあるのか、応急手当はどのように行えばよいのかが学べ、社会に出て必要なコミュニケーションスキルも身につけることもできました。

1年生の時から子どもと関わることで、子どもとのコミュニケーションの取り方や現状を学ぶことができ、教育実習に役立てることができました。この授業で学んだことを、将来、教員になった時にも活用していきたいです。

教育学部
学校教育教員養成課程
4年

中澤　沙綾

初年次科目について

今思い返せば、初年次科目は「大学で学んでいくための基礎の基礎」を学ぶ、大切なものでした。私は初年次科目を通して、高等学校までの「教えてもらう」から、大学での「自分から調べて考える」学習方法への変化に対応でき、今では興味があることを「自分から調べて考える」学習方法の方が気に入っています。もし、初年次科目をやらずに、いきなり大学らしい専門的な授業から入っていたら、きっと混乱していたと思います。

教育学部では「課題探求実践セミナー」で、1年間を通して「子ども理解」を深めます。また、学生同士で連携して企画書を作成したり、地域の方々と協力して活動したりして、大きな達成感とともに、連携・協力の重要さを実感することができます。さらにこの授業は、他の初年次科目で学んだことをすぐに実践できることが特徴です。

特に「課題探求実践セミナー」は、教育実習の時に必ず自ら振り返ることになるものだと思うので、「教員ならどうするか」を考えながら受講することをオススメします。

理学部
応用理学科
平成29年３月卒業

枝重　裕美香

「大学基礎論」と「学問基礎論」

1年次の第1学期に「大学基礎論」、第2学期に「学問基礎論」という授業があります。

「大学基礎論」では、様々な企業の講師の方々から実際の仕事がどんなものなのかというお話から、企業が大学生に求めるものは何なのかといったことまで知ることができました。また、企業の方のお話を聞いた翌週にはグループで振り返りをしました。グループディスカッションやプレゼン発表などから、自分にはない考えに触れることができ、とてもためになりました。

「学問基礎論」の授業内容はコースごとに分かれ、先生方の研究内容について調べてレポートやプレゼンをするというものでした。ひとくくりに「生物コース」や「化学コース」と言っても研究内容は様々で、自分の興味がある研究について考える良い機会になりました。

初年次科目では「習う」から「学ぶ」へと姿勢を変えることができ、また自分が本当にやりたいことを見つける手掛かりになると思います。

理学部
理学科
3年

山脇　康司

「課題探求実践セミナー」について

自分の大学生のやることのイメージは「研究する」というものでした。高校での先生から習う授業とは違い、何か特定のことについて既に判明していることを集めて考察していかなくてはなりません。自分はこの「研究する」ということがとても難しいものだと思っていました。

自分が受講した「課題探求実践セミナー（理学部）」では「研究」の入門編のようなことをします。グループを作り自分の興味のある話題を好き勝手に調べて発表します。自分たちは「天然ダイヤモンドと人工ダイヤモンドの違い」について調べました。ほかの班では「じゃんけんの必勝法」や「四葉のクローバーの探し方」を調べて発表していました。先輩の中には「週刊少年ジャンプは何故月曜日発売なのか」を調べた人もいたみたいです。

自分は「課題探求実践セミナー」を一通りやったことで「研究する」ことへの抵抗はなくなり、「ほかに面白そうなことはないかな？」と思うようになりました。
「課題探求実践セミナー」では、大学でやることの入り口を覗くことができると思います。

農学部
農学科
4年

山口　真優葉

「初年次科目」

初年次科目ではこれまでの学習スタイルから大学の学習スタイルに切り替えるための時間であったと思います。

「大学基礎論」「学問基礎論」「課題探求実践セミナー」ではグループで学習を行い、班ごとに決めた題材に沿って人前でプレゼンを行います。高校まではグループでの学習も人前で発表することもほとんどありません。その経験不足を補うための授業だと感じました。いかにわかりやすく筋を通して話すか、一見簡単そうに思えることですが、いざやってみると時間が足りなかったり話のつじつまが合わなかったりと大変でした。また、各々が調べてきたことをお互いに理解しないといけませんでした。今までのグループ発表といえばみんなで同じように学んだことをまとめていたので必要のなかったことでしたが、知らないことを集めつつまとめていくというのはなかなか難しかったです。

そろそろ卒論発表を意識する学年になりました。初年次科目で頭を悩ませたグループ発表が今は自分の自信になっていると感じます。

農学部
農学科
4年

金澤　知行

初年次科目　～「学問基礎論」について～

初年次科目は高知大学に入学した全ての学生が共通して受講する授業です。大学において必要な基礎を身に付けることがこの科目の目的です。その中でも「学問基礎論」は入学後、私にとって最も糧になった科目の1つです。「学問基礎論」はグループワークが中心となっており、入学後、授業で必須のグループワークの基礎を学ぶことができます。授業を通して「自分の意見をうまく伝える力」、「グループの意見をまとめる力」、「グループの意見を全体に発表する力」を身に付けることができます。私自身、これまで受けてきた授業の中でグループワークの場があった際には、「学問基礎論」で得た力を活かしてグループワークを進めていくことができました。

また、「学問基礎論」を通じてグループのメンバーと仲を深めることができ、入学後の友達作りの場としてもとても有意義な時間となります。

医学部
医学科
2年

菅田　夏央

「課題探求実践セミナー」について

医学科の初年次科目には一般教養を学ぶものだけでなく、将来医学に携わる私たちにとって、思考構築、研究への取り組みなどの助けとなる科目があります。その中の一つに、PBL(問題基盤型学習法)を取り入れている「課題探求実践セミナー」があります。この授業は、与えられた医療時事に自ら課題を設定し、それを解決するための探求を実践的に行います。まずは、個人ベースで情報を取捨選択し、自分の意見をまとめます。次に、他者（医療チームや患者さん）との質の高い情報共有を目指し、グループディスカッション、口頭での発表、レポート作成などをします。海外帰国生の私は、インター校で似た形式の授業を多数経験してきましたが、この授業は自らの課題設定から解決、他者との共有と目標が今までよりさらに高次である上に扱う内容が専門分野につながっていて、洞察力の深さや高いコミュニケーション能力、医学知識を養う点で、新しく多くのことを学ぶことができました。

この授業は将来の医療現場を踏まえたものであると同時に他のどの科目の学習にも通じる学びの基本が含まれていると思います。2年次以降の学習、研究にも繋がっていく授業です。

医学部
看護学科
2年

川竹　伶奈

「大学基礎論」について

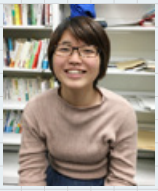
「大学基礎論」は医学科・看護学科が合同で学習していく授業です。医療者になるためにどういった考えが必要か、また医療の実態を患者さんと医療者の双方の視点から考えていきます。提示された課題に対して、グループワークで意見を出し合い、考えを導いていきます。その後、グループごとで発表を行い意見交換します。患者さんの視点に立つための外来患者への付き添い実習では、実際に患者さんと会話することで医療や医療者の良い点・悪い点が明確になり、これからどうしていくべきかを考えていくきっかけになります。また医師、看護師以外の現場で働く医療者の方々の講義があり、各部署の連携があってこそ患者さんにとって良い医療が成り立っており、その部署ごとの存在意義を見出すことができることを感じます。この授業の特徴は医学科生と意見の共有ができることだと思います。同じ課題でも着目点が異なり、新しい考え方が生まれてきます。

地域協働学部
地域協働学科
2年

勝田　友音

「大学基礎論」について

「大学基礎論」では、企業に勤めている方や公務員の方、起業した方など、さまざまな方から話を伺いました。なぜその仕事に就こうと思ったのか、仕事をしていく中で大変なことや嬉しいことは何か、今の自分たちにアドバイスなどかなり深いところまで伺うことができました。その中でそれぞれが大事だと思うことを感じ取っていき、自らの学びにつなげていきました。地域協働学部では、様々な立場や年齢の人と「協働」して地域活性化を図っていくためのスキルを学んでいるので、実際に地域の中で「協働」している方の経験を聞くことで、実習に対してどのような姿勢で臨むのかということを考える機会となりました。また、ただ話を聞くだけでなく、話を聞いた後にグループワークを行い、自分はどんなところが印象に残ったのかを話し合うことで、より理解を深めることができました。



地域協働学部
地域協働学科
2年

千頭　里咲

「課題探求実践セミナー」

「課題探求実践セミナー」は地域協働学部の1年生にとっては地域に入る初めての授業です。私たちの学部は「課題探求実践セミナー」のように地域に入り、地域の方々と関わる機会がカリキュラムとして組み込まれています。したがって、この学部で今後地域に入って行くための準備段階として大切な授業であると私は考えています。このように、大学4年間を見据えると大切な授業であると思いますが、授業内容はとても楽しいです。

私は、この授業で黒潮町に行き、地元の小学生とおばあちゃんたちと一緒に椿の芽かき作業 をしました。このように様々な年齢層の人と関わることができます。
講義等で知識や技術を学ぶことも必要です。しかし、実際に現場へ行き、自分の五感で地域の現状や課題などを理解したほうがより深い学びに繋げられると思います。また、地域に入ることで本やデータなどの表面的な情報よりも地域の生の声を聞くことができます。

※椿の不必要な芽を切り取る作業の名前

土佐さきがけプログラム
国際人材育成コース
2年

今西　ちせり

「大学基礎論」について

私は第１学期に初年次科目である「大学基礎論」を受講しました。この授業では、先生方による講義とグループワークを通して、大学で学ぶ意義をはじめ、国際化や地域社会について考えました。私にとって外国についてだけでなく、地域についても学ぶことができることは、とても魅力的でした。なぜなら、私は高知県出身で、地域のことにとても興味を持っていたからです。出身地が異なる人と地域について考える機会がなかったので、良い刺激を受けることができました。グループに分かれて意見を交換したときは、自分の視点に加え、他の人の視点が入ることで、今まで気づかなかったことを発見することができてよかったです。また、グループごとのプレゼンテーションもありました。グループの中には、国際人材育成コースの学生だけでなく、生命・環境人材育成コースやグリーンサイエンス人材育成コースの学生もいました。発表資料のなかに化学式が入っているなどといった理系らしさも加わったため、とても興味深かったです。大学に入り、人前で発表する機会が増えてくる中で、実際に発表することができたため、良い経験になってよかったです。これからの大学生活また社会で必要となってくる知識や技術を学ぶことができることが、初年次科目の特徴だと思いました。

土佐さきがけプログラム
グリーンサイエンス
人材育成コース
2年

松浦　瞳

初年次科目英語について

私は初年次科目で英語を受講しました。プレースメントテストによって上級・中級・初級に分けられ、それぞれに適した学習が進められます。高校までの英語と違うところは、英語から日本語に訳す、日本語から英語に訳すというだけでなく、英語から英語に訳すということが必要となる点です。私のクラスはニューヨーク・タイムズの記事を読み、書かれている英語で複雑な単語は簡単な英語に訳し、正しく日本語訳するという講義でした。受講するにあたって、英英辞典というものがとても役に立ちました。これは難しい英単語を簡単な英語に訳してくれる、日本でいう国語辞典のようなもので、訳する際に非常に便利です。

英語という教科はどの分野でも必ず必要となってくる大事な科目です。是非これらを役立てて、自分の英語力を伸ばしていってください。

特集

初年次科目

初年次科目授業の感想、意義、
受講にあたってのアドバイス等

Part 2 教員から

人文社会科学部

切詰　和雅

「学問基礎論」について

今回は人文社会科学部社会科学コースの初年次科目の一つである「学問基礎論」についてご紹介したいと思います。

まず、「学問基礎論」の位置づけについて、簡単に説明します。社会科学コースでは、卒業論文の執筆・提出が、卒業要件となっています。とはいえ、いきなり2万字超の論文を書けと言われても、それは無理というものです。なぜなら、論文を書くためには、専門的な知識の修得はもちろん、資料・データ、参考文献等の検索方法や収集方法を知っていなければなりませんし、課題を発見し、その解決策を提案できる能力や、自分の頭で考え自分の言葉で文章を書く能力、論文を作成するにあたってのルール（参考文献の引用の仕方等）の理解など、様々な知識、能力、ノウハウが求められるからです。そこで、1年生のときから少しずつ力をつけていけるよう、少人数の授業（ゼミ）が設計されています。大きな流れとしては、「大学基礎論」（1年生第1学期）、「学問基礎論」（1年生第2学期）、「社会制度設計演習Ⅰ・Ⅱ」（2年生）、「専門演習Ⅰ・Ⅱ」（3年生）を経て、「卒業論文・専門演習Ⅲ・Ⅳ」と続き、最終的に卒業論文を執筆できる力を身についていくことになります。

文章を書く能力や理論的に考える能力、グループワークやプレゼンについてのノウハウなど、一朝一夕には獲得し得ない能力は、上記したゼミを通じて、つまり長い期間をかけていわば訓練していくことになります。そのなかで特に「学問基礎論」で意識してほしいことは、懐疑的な視点です。

「学問基礎論」は各教員の裁量で授業内容は若干変わってきますが、共通の事項として「1冊は本を読む」ということが決められています。その本を読む中で、「なぜ？」「本当に？」という懐疑的な視点をもってもらいたいと思います。なぜなら、「なぜ？」という疑問や思いが、「学問」の「基礎」だと思うからです。なぜそうなるのだろう、本当に著者の述べていることは妥当するのだろうか、こういう思いがあるからこそ、それについて調べようということになります。調べているうちに、あらたな疑問が生まれ、それについて調べる、学問はこの繰り返しだと思います。本に書かれてあることを鵜呑みにするのではなくて、しっかり自分の頭で考えることが重要だと思います。

最後に一言、アドバイスを。決して楽をしようとは思わないこと。楽をしても力はつきません。将来の自分のために、すべき苦労はしてください。

教育学部

山﨑　聡

学びのルネッサンス

皆さんは何のために大学に入学したのでしょうか。（各人多少の温度差はあれども）「学ぶ」ためだと思います。では、「学び」にとって一番重要なことは何でしょうか。それは「好奇心」だと思います。好奇心とは、簡単にいえば、自分を含めた世界に対して、「あれ？」「どうして？」という疑問を抱き、その答えを「知りたい！」（驚きや謎がそのままでは我慢できない）という原初的欲求であり、学びの根本的動因です。今現在、皆さんの心の中にどれくらい好奇心があるでしょうか。恐らく、誰でも小さい頃は好奇心に満ち溢れる（周囲の大人たちに「何？」「何故？」を連発する）生活を送っていたと思います。ですが、受験勉強等により、純粋に発露する好奇心を追求することは抑えられてきたのかもしれません。しかし、それはほんの「一時」です。大学生となった皆さんには、そうした縛りはもうありません。何を学んでも自由です。かつて抑制されてきた純粋な好奇心を再び解放することができるのです。そうはいっても、「今更、そんなこといわれてもなぁ…。別にそんなに強烈に知りたいことや学びたいことなんて無いし…」と思う人もいるかもしれません。ですが、それは「冬眠」状態に過ぎません。そこで、好奇心を眠りから覚まし、その塊であった幼少期の自分を取り戻しませんか。そのために、今この瞬間から、「自分が知りたいこと、興味があること、疑問に思うことって何だろう？」と自分自身に問いかけてみましょう。眠っていた好奇心が少しずつ再起動するはずです。そうやって、好奇心に絶えず働きかけながら、今の生活を見直してみてください。きっともっと追究したいと思える端緒が発見されるはずです。今何気なく見聞きしていることや出席している講義等々においても、好奇心のアンテナが研ぎ澄まされた状態であれば、必ず新たな発見、契機が見つかります。後は、再興した好奇心の発露の赴くままに追究し続けてください。学びのルネッサンスの始まりです。

理工学部

鈴木　一弘

「情報処理」はパソコン教室じゃないんです

みなさんはデマに騙されない自信はありますか？「あります！」と元気よく答えてくれたそこのあなた。要注意です。詐欺に騙されない自信がある人ほど詐欺に遭いやすいと言いますが、デマも同じです（と言われてすぐに納得したあなたも要注意ですよ）。

LINEやTwitterのようなSNS（ソーシャルネットワーキングサービス）では、毎日のようにデマが生まれ、多くの人が騙されて安易にリツイート等をしてしまい、デマの拡散に無自覚に加担しています。エイプリルフールのように嘘であることがハッキリわかるものは稀で、例えば「芸能人の○○さんが逮捕された」のように、100％嘘だとは即座に断定できないものがほとんどです。検索をして信頼性の高いニュースメディアを調べれば、デマであることがすぐにわかるような場合でさえ、調べることをサボってそのままリツイートをする人が多いのが現状でしょう。

情報に騙されないことも重要ですが、自分が騙す側にならないことも重要です。今は指１本で情報を全世界に発信し、大勢に影響を与えることができる時代です。指１本で炎上などの大事（おおごと）にならないためには、コンピュータの操作だけでなくインターネットやメールなどの情報技術の仕組み、社会常識や法律の知識、ネットサービスの仕組みやマナー、ネット犯罪のトレンドなどをひととおり知っておくべきでしょう。

"情報処理の授業"というとパソコン教室のようにコンピュータの操作を習う授業だと思われがちですが、操作だけを身につけても情報化社会の荒波で生き抜くことはできません。コンピュータという"船"の操作はもちろんのこと、情報化社会という"海"そのものについてもきちんと知る必要があるのです。情報を入手し、処理し、発信するまでの広い意味での情報リテラシーを初年次科目「情報処理」で学び、厳しくも楽しい情報化社会を満喫してほしいと思います。

農林海洋科学部

森　牧人

新学部「農林海洋科学部」の大学基礎論
ー理念的な側面と講義増の取り組みー

読者の皆さんもご存知のように昨年（2016年）4月より物部キャンパスの旧農学部は改組を経て「農林海洋科学部」として新たに出発した。学生定員も増え、新1年生は約200名を数える。この小文では、新しい学部でリニューアルされた大学基礎論の理念的な側面と講義回数を増やした取り組みについて簡単に紹介したい。

農林海洋科学部版「大学基礎論」の立ち上げに当たっては、担当教員間での『農林海洋科学（という学問領域）成立の必然性』の議論から始まった。この必然性を説明できる人間が今どこかにいるのか？存在意義を明示できないような学部では、学生に科学を教えられるわけがない！自問自答しつつ、自らも担当教員として参画し、これらの問いを周りに投げかけてくれた尾形凡生新学部長の言葉が新「基礎論」の出発点である。

具体的には、（1）学部の設立理念を提示し、農学と海洋科学が融合する必然性について理解させる（2）大学人・科学を学んだ社会人にふさわしい振舞い方を身に着けさせる（3）グループワーク（以下、GW）の手法を用いて、自分自身の意見の表明・他人の意見の論理的理解・複数の意見の取りまとめによるグループとしての意見形成に取り組ませ、わかりやすく説得力のあるプレゼンテーションに至る一連のプロセスを複数回体験させる、以上のことが開講前に担当教員間で共有された。

授業の特徴はとにかく講義の回数を増やしたことである。特別講義（学部長・学務委員長・学部内文化系教員）に加え、5回の基本講義を期間中盤に据えた。特に後者では、新入生に農林海洋科学部の「基礎の基礎」がしっかりと教授された。講義後、固定脚の大教室（222番教室）にも関わらず班ごとに座席を指定してＧＷの時間を確保するとともに、全体での質疑応答にも十分に時間を割いた。講師ー学生間の思いのほか活発な議論に司会を担当した筆者はたいへん驚いた。これら8講は「大学基礎論」に「農林海洋科学原論」的な内容を盛り込むには十分であった。もちろん、従来型のGW＋プレゼンも期間中に6講分（2サイクル）しっかりと確保された。

これまでのGW型の「大学基礎論」のよいところを活かしつつ、講義の回数を増やすことを通じて、物部教員が独自に進化させた「大学基礎論」について紹介させていただいた。

医学部
看護学科

池内　和代

大学で看護学を学ぶ姿勢を考える場
～【学問基礎論】から～

【学問基礎論】は「大学基礎論」「課題探求実践セミナー」と連動させながら初年次科目として授業を展開しています。

授業の目標は、1）看護の基盤となる健康的な生活について自ら考えることができるようになる。2）看護学の学問基盤となる人間の健康や環境について考えることができるようになる。3）医療を受ける人々や医療を提供する人々と接し看護への興味や関心を深める。　の3項目です。

実際の授業では、まず大学で学ぶということはどういうことかを共に考えることからはじめます。そして、看護を学ぶ初学者として今までの生活（自分自身や家族、地域）を振り返り、健康的な生活とはどういうことなのかを考え、ディスカッションを通して人間の健康と環境に繋げて視点を広げていきます。さらに、健康を支える医師や看護師からの講義を受け、看護職に期待するメッセージをいただいた後、臨床早期実習を体験します。学生は自分が見聞きした内容、感じたことを学生間で共有し新しい発見をしていきます。

本授業の方法は、自らの生活体験や文献、講義、実習体験をもとにテーマを絞り、テーマご

とにグループを違えてのグループディスカッションを行います。このグループディスカッションで学生は、「大学基礎論」「課題探求実践セミナー」等で学んだ内容も役立てながら自分の意見を相手に伝えまた他者の意見をよく聞きまとめる作業を通して、看護学に対する興味や関心を深めていきます。

平成28年度は【学問基礎論】を前任の教員から受け継いだ初めての年でした。【学問基礎論】は入学して来た学生たちがこれからの4年間、自ら授業を楽しく学び意味づけ、生き生きとした大学生活を送ることができるために学生たちと作り上げる看護入門授業であると考えています。ですから、本授業は各々の学生の意欲無くしては成り立たないのです。まさしく、【学問基礎論】はこれから大学で看護学を学ぶ姿勢を学生個々が考える場であると言っても過言ではありません。今後も学生たちと共にさらにパワーアップしていきたいと考えています。

地域協働学部

霜浦　森平

「課題探求実践セミナー」を通して地域の想いを理解する

地域の再生と持続的発展には、多様で変化に富む複雑な地域の課題を発見・分析・統合し、産業の分野や領域の壁を越えて人や組織などの協働を創出し、課題を解決することのできる人材（＝「地域協働型産業人材」）が求められています。より具体的には、第一次産業、第二次産業、第三次産業の協働を活性化させるとともに、地域の多様な資源を利用した産業、ビジネス、組織を新たに創りだす「地域協働マネジメント力」を有した人材の役割が注目されています。地域協働学部では、こういった「地域協働型産業人材」育成のために、1年次第1学期に初年次科目「課題探求実践セミナー」を開講しています。授業は、①事前学習（地域の情報の下調べ、地域の実情の予測）、②学外での実習（実際に地域を訪問し、観察及び住民・活動当事者とのコミュニケーションを通じて実態を把握する）、③事後学習（実習で得た情報をもとに、地域の実情を検討し、実習での振る舞いを振り返り改善点を共有する）で構成されており、基本的にこれを実習地ごとに繰り返す形で、実習形式で行なわれることになります。平成28年度の実習では、学生は4グループに分かれ、高知県ボランティアNPOセンター、南国市稲生集落活動センター、黒潮町、香南市、大豊町、高知市土佐山を訪問し、五感を活用した観察とサービスラーニングを通じて、地域の実情を把握するための実習に取り組みました。さらに、農作業や草刈り、地域イベントの準備等様々なサービスラーニングや地元団体の案内によるまち歩き、住民との対話などの実習にも取り組んでいます。こういった実習を通じて、地域で活動・活躍するための基本マナーや地域の人たちとコミュニケーションの取り方を学ぶとともに、地域の状況・地域の人たちの考えや想いを知ることにより地域への理解を深めること目指しています。

土佐さきがけプログラム

前西　繁成

多様な背景を持つ人たちと共に学ぶ

土佐さきがけプログラム（TSP）の大学基礎論を担当して4年目になります。TSPで行っている大学基礎論の特徴は、学生数が20名弱の少人数であること、文系、理系の学生が混ざっていること、また留学生が含まれていることです。

毎年それらの特徴を活かすために工夫を凝らしています。入学後すぐに受ける授業のため、まず自己紹介の時間を設けています。例えば自分が育った地域や過去のお気に入りの写真をもって来てもらい、3分間で自己紹介してもらいます。県外からの入学生も多いため、まずそれだけで育った風土や文化の違いを感じることができます。

その後、大学の各部門の幹部の方よりお話をいただく機会を設けており、大学の考え方や社会や地域における役割を学ぶことができます。

グループワークとプレゼンテーションは2回実施しています。高校時代にはあまり体験していないかもしれませんが、グループで意見を出し合い、一つにまとめていくことを学びます。1回目が終了した時にアンケートをとり、グループワークの意義や自分の役割について考えてもらう機会を提供しています。最初のグループワークでは、過去に学んできたことや育った環境が違う人たちと議論することの難しさを感じますが、2回目には改善され、相手の話をよく聞き、また自分の意見も相手に伝わるよう丁寧に表現することができるようになります。

2回目のグループワークでは、高知の活性化をテーマにしています。書物やネットで調べた情報に加えて、フィールドに出て専門家に直接インタビューすることを奨励しています。実際にアーティストにインタビューに行ったり、商店街の方に状況を尋ねたりして、自分よりずっと経験ある方から学ぶ意義を感じてもらっています。インタビューを成功させるために、事前に相手の情報について調べたり、適切な質問を用意することも学びます。

この授業を通じて、4年後のなりたい自分について具体的にイメージをもってもらえればと願っています。

共通教育自己点検・自己評価部会の活動

平成 28 年度部会長　理工学部　松井 透

共通教育自己点検・自己評価部会は、FD部会と連携・協力しながら共通教育の各分科会で行われている自己点検・自己評価活動の統括と支援を行っています。最近は5週目・15週目アンケートによる「授業改善アクションプラン」の実施に重点を置いています。この学生アンケートは皆さんも回答したことがあると思います。

「授業改善アクションプラン」には、学生アンケートの他に「同僚によるピア・レビュー」、「授業参観」、「スチューデントフィードバック」など様々な方法が準備されていますが、多くの教員は学生アンケートを選択しています。まず、教員は授業開始から5週目に学生アンケートを実施して学生の意見を集約・分析し、この結果から授業内容をどう改善していくのが良いか? を考えて授業改善計画を作成します。今回は、学生さんがこのアンケートにどのように回答しているのか、その回答パターンの分析例を紹介してみようと思います。

今回の分析は、選択式のアンケート項目に限定し、平成27年度の5週目に学生アンケートを実施した全授業を対象に行いました。まず、授業ごとに受講生数が異なるため、「標準化」という作業を行い、格差をなくします。次に授業間およびアンケート項目間で「どれだけ似ているか?」を示す「類似度」を算出します。この類似度をもとに、似ているもの同士をまとめあげてグループを作る「クラスター分析」を行いました。その結果が図1です。横軸は授業題目(具体的な授業題目名は伏せています)を、縦軸は質問項目を示しています。小さな正方形は各項目を表し、青色が濃いほどその項目が多いことを、白に近いほど少ないことを意味します。

まずは質問項目を見ていきましょう。赤色枠で示した「はい」のグループ、オレンジ色枠で示した「どちらかというとはい」のグループ、黄色枠で示した「どちらともいえない」のグループ…といったように綺麗な6つのグループに分けられました。また、「はい」「どちらかというとはい」の回答がその大部分を占めていて、「どちらかというといいえ」「いいえ」という否定的な回答はとても少ないことが分かります。多くの授業は学生さんに好評なことが分かります。

続いて授業題目を見ていきましょう。こちらは赤の破線で示した位置で（1）「はい」が多い授業、（2）「はい」「どちらかというとはい」が多い授業、（3）「どちらかというとはい」が多い授業、（4）「どちらかというとはい」「どちらともいえない」が多い授業、の4つのグループに分けられました。「はい」が多い授業のグループは、今回のアンケートでは「とても良い授業」といえるかと思いますが、「未回答」もそこそこ見られることから、学生の「やる気」をもう少し引き出す必要があるかもしれません。「どちらかというとはい」「どちらともいえない」が多い授業のグループは、「どちらかというといいえ」や「いいえ」という否定的な項目も見られることから、今後の改善点が多いグループといえそうです。このような授業では、ちょっと面倒ですがぜひ「自由記述欄」に問題点を書いてもらえると嬉しいですね。

このように、学生アンケートは様々な角度から分析を行っています。皆さんもアンケートに答える際に「またか…」と思わず、真摯に向き合って下さい。その結果は授業にフィードバックされ、結果的に皆さんに対して様々な形で還ってきますよ。

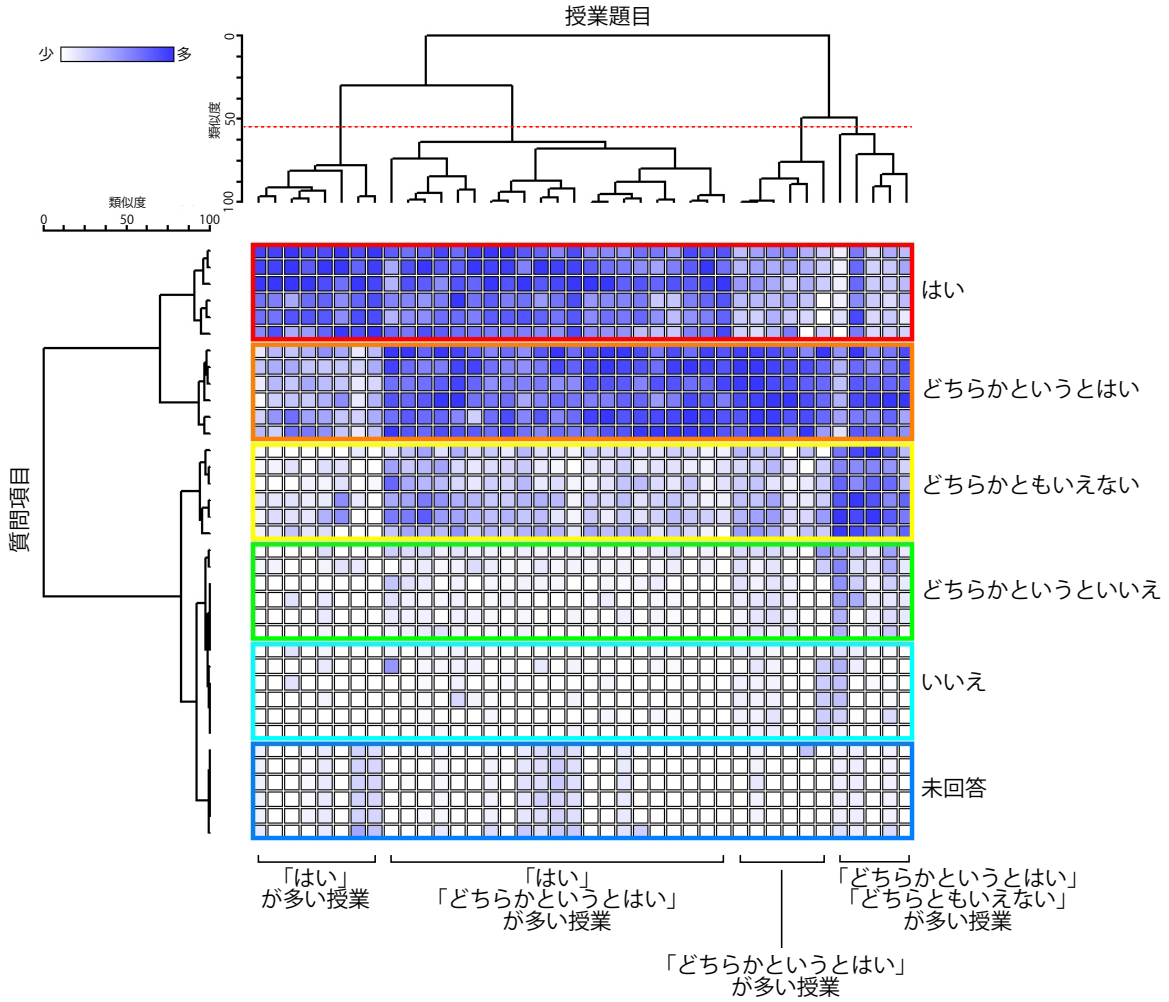


図1. 平成27年度実施の5週目アンケート結果をもとに、クラスター分析を行った結果

共通教育210番教室を改修
アクティブ・ラーニングに適した教室へ

平成28年度の春休みの期間に、共通教育210番教室の改修が行われました。

目立っていた老朽化への対応に加え、不足するアクティブ・ラーニングに利活用できる教室を整備するために、下記のような改修を行っています。アクティブ・ラーニングを取り入れた授業を行う場合は、ぜひ210番教室をご活用ください。

改修前

改修後

●教室前面にあった舞台を撤去し、移動式の机を2人掛け・3人掛けから、1人掛けへ変更しました。そうすることで、空間を広く、柔軟に使えるようになり、教室定員も増加しました。

●ホワイトボードは、従来可動式の小さなホワイトボードしかありませんでしたが、前面壁に巨大な固定式ホワイトボードを設置したほか、側面に4つの小ホワイトボードを設置しています。それぞれがスクリーンとしても使用でき、ポータブルプロジェクターを併用することでグループに分かれてのプレゼンテーションが可能になるなど、様々なグループ活動に対応できるようになりました。（ポータブルプロジェクターは教室機器ボックス内に2台設置しています）

編集後記

「初年次科目」は、主に1年生を対象としたもので、これからの学びにとってエッセンシャルな内容の修得を目的としています。学部の違いに応じて、それぞれ特色ある授業構成となっているので、講義を受けていくうちに学部ごとのアイデンティティが形成されてゆきます。先輩のアドバイスも参考にしつつ、楽しく、積極的にコミットしましょう。（Y）

高知大学共通教育広報誌 PipeLine［パイプライン］No.49

発　行 / 高知大学共通教育実施委員会
編　集 / 共通教育実施委員会広報部会
〒780-8520 高知市曙町2丁目5-1
☎088-844-8168（学務課全学・共通教育係）
発行日 / 2017年6月
制　作 / ㈲西村謄写堂

□広報・記事についてのご意見をお待ちしています。
Mail：gm06@kochi-u.ac.jp